

修辞学

森 雄一

本稿は、前回展望の対象期間以降、2013～2015年を扱う。この期間には、多門靖容『比喩論』(2014、風間書房)と、はんざわかんいち『表現の喩楽』(2015、明治書院)という、長年に渡って比喩研究を牽引してきた二人の研究者の著書が刊行された。前者は、現代語を中心に隠喩の本質や機能を扱った1～3章と古典文学作品を題材に実証的な論考をまとめた4～9章から構成されている。後者は、村上春樹・小林秀雄・富士谷御杖・政治言説・言語発達など多様な題材を、比喩を切り口にして論じたものである。両書の肌合いはかなり異なるが、理論的な枠組みを前提とせず、対象となる言語現象や作品・文学者それぞれに固有の問題を発見し、それにふさわしい道具立てをその都度用意し論じていくという、独創性の高いスタイルであるところは共通しているといつてよい。理論的な枠組みからのレトリックの分析としては、山梨正明『修辞的表現論 認知と言葉の技巧』(2015、開拓社)が刊行された。認知能力・認知プロセスの観点から、様々な言語技巧を扱っており、多くの新見に富んでいる。認知言語学的アプローチでは、概念メタファーの研究も収穫期にあり、荒川洋平『デジタル・メタファー』(2013、東京外国語大学出版会)は、コンピューターに関する多種多様なメタファーを45の「デジタル・メタファー」として定式化し、その背後にある思考に迫っている。本誌99号にも、松浦光「概念メタファーから

みた空模様」が掲載され、このアプローチにもまだ掘り尽くされていない鉱脈があると考えられる。また、本誌102号掲載の、稲益佐知子「「恐怖」を修飾する表現について」は、直喩を中心に扱っているとはいえ、「恐怖」という抽象的なものをどのように捉えるか、という概念メタファー論とも共通する問題意識を持つものであり、認知的なアプローチとも親和性が高い。語用論的なアプローチでは、論証的ポリフォニー理論と意味ブロック理論を用いた大久保朝憲「アイロニー・からかい・緩叙法・婉曲表現についての試論」(『関西大学文学論集』64-4、2015)が、新しい観点から興味深い分析を行っている。個別の作家・作品の修辞的側面を扱った文体論的研究として、芳川泰久・西脇雅彦『村上春樹 読める比喩事典』(2013、ミネルヴァ書房)は、村上春樹の比喩をテーマ別に集めるとともに、「コラム」や「レクチャー」の形で独自の考察を行っている。水藤新子「三島由紀夫「橋づくし」の表現」(『中央学院大学人間・自然論叢』39、2015)は、「凝った修辞が多々出現する作品ではない」としつつも、この作品を魅力的なものたらしめている表現技巧を修辞面も含め丁寧に解説している。本誌101号に掲載された畑中基紀「『坊っちゃん』における悪態の機能」と、李種恩・柳澤浩哉「『それから』の表現に現れた代助の思考の特徴」は、漱石作品の言語表現の分析であるが、修辞学的な観点から読んででも得るところが多いものである。以上に見たように、修辞学研究において実りの多い3年間であった。今期の成果をうけた研究の進展を期待したい。(成蹊大学)